

おそらく 月刊 mamadas

ママダス

編集室 ☎092 (525) 6866

第3号

ごあいさつ

九州にこだわって20年。福岡でフォトグラファー、ライター、ディレクターのひとり3役をやっている間々田です。わが事務所のニュースレターを仕事でお世話になった方、ご縁があった方にお届けしておりますが、あぁ、前号でみなさんの声をお寄せくださいと呼びかけたところ、メールでの反応が1件、ハガキが1件。ひょっとして届いていないの、迷惑なのかなど思っていたら、福岡県中小企業家同友会の例会で、いつも読んでいますと複数の方から声をかけていただき、出でてよかったと思った瞬間となりました。

メールをいただいた永野さん、ハガキをいただいた浅野さん、ありがとうございました。というわけで、今号もご愛読ください。



◆ツルとかつどん◆

高校1年生と中学1年生。
わが家の二人娘の日常です。

今回も下の娘、かつどんの話。わが家というか、私とかつどんは野球中継をよくラジオで聞きます。彼女はTBS系のRKB毎日、私はテレビ朝日系のKBC九州朝日放送。で、仕事を終えて家でごはんを食べながら野球中継を聞く時、ラジオ局争いでいつもひと悶着あります(ちなみにテレビ中継時は中継自体が少ないのでお互いに穏やかです)。私は頑としてKBC。それでも大人ですから、時には譲りますが、局争いに負けたら彼女、部屋にこもり、RKBという具合。

ある時、どうしてそんなにこの局が好きなのと聞いたら、野球中継が終わったら「ホークス歌の応援団」という番組が始まり、勝っても負けても試合をもう一度、念入りに振り返ってくれるからだそう。さらに番組中に流れる70年代80年代の歌謡曲が気に入っていて、まったく体が合うそうなのです。

おお、さすが、わが娘。のんきなおやじは勝手にそう思い込み、今夜も警固町のスナックで酔っぱらいながら「恋の季節」をがなっているのです。トホホ。

今月のOh! しごと

北九州のとある団体の40周年記念史の仕事でうちの熊本(家内です)が、ディレクター兼ライターとして週に2〜3回、八幡通いを始め、半年くらいが経ちます。

私は主に撮影とコラム執筆、それに文章校正などを担当しておりますが、それはさておき、八幡に撮影に行くとき、さすが日本を代表する重工業地帯です、存在感たっぷりの昭和の工場群が、次々に目に飛び込んできます。

この工場が面白い。もう芸術品です。例えば三菱マテリアル。どうしてこういうパイプの取り回しになるのか。そこにはもちろん、しっかりと計算がされているとは思いますが、この曲がり具合。しかも、このサビ具合。無機質な工場でありながら、なぜか人間くささを感じさせて思わず見入ってしまいます。

そういえば「工場萌え」ブームがありますね。ウィキペディアで検索すると、「日本においてコンビナートや工場の夜間照明や煙突・配管・タンク群の、マツシブな『構造美』

を愛する人々が増えており、悪い景観とされていた工場に美を見出す動きがインターネットを通じて拡大した(編集しています)とあります。また、写真集も発行されてブームを後押ししたようですが、この工場萌え、私のなかではあの近未来映画の傑作「ブレードランナー」に源流があるようです。

大学卒業後、東京でフリーターに励んでいた時、夜の仕事(怪しい仕事ではありませんよ。閉店後の店舗清掃です)で、よく首都高速の横羽線を利用することがあったのですが、車上から見る川崎工業地帯のライトアップがきれいで「これブレードランナーの世界じゃん」などと思ったものです。

「おや、テツじゃなかったの。っていわれそうですが、昭和の工場にも惹かれるものがあります。今度は工場夜景にも挑戦しようかな。」



どうです、このパイプの群れ。近くで見ると相当な迫力です。

頑固一鉄

今回はリクエストにお応えして新幹線、しかもその方が高く評価していたレールスターにしました。私はローカル線に惹かれますので新幹線なんかと思っていたのですが、前回紹介した宗像市のテツの聖地へ行く途上、新幹線が撮れるスポットがあるとネットに出ていたので行ってみました。そこは線路の両側に住宅地、宅地間をつなぐための橋がかかっており、そこから新幹線が見下ろせます。ただ、橋上には高さ5mくらいの金網が巡らしてあって網越しに撮るしかなく、望遠レンズを網の穴部分に押しあててはめになりました。そんな環境のうえ、沿線に魅力がなく最初は気乗りしなかったのですが、悲しいかな、テツの性(さが)、そのうち「画面いっぱいに止めてやる」と奮起。撮影に夢中になってしまいました。JR西日本のホームページには線路の高さくらいから撮った写真が使っていますが、私のような撮りテツにはそっちの角度も気になるなあ。新幹線写真は先頭車両の造形をいかに表現するかに尽きるようです。



下の列車は田川郡赤村を走っている赤村トロッコ列車です。田川郡各町が共同で作ったガイドブックの撮影・原稿を担当した時、初めて出会いました。田川の石炭全盛時代、石炭搬出用の線路が足らなくなり、苅田港と結ぶべく計画された幻の油須原線跡地を走りますが、新幹線の対極にあるまことにのんびりした列車です。小さな牽引車(運転手さんが顔半分見えています)は岐阜県の神岡鉱山で活躍していたバッテリー機関車が使われていて、黄色い部分にバッテリーがぎっしり詰まっているとか。今思えば、時代を先取りしていた機関車といえそうです。



編集後記

第3号をお届けします。みなさん、細かいところまで見ていただいている、下の写真が楽しみという方もいらっしゃると思います。そこで今回はイッシュとのツーショット。鹿児島島の池田湖にいらるといわれる幻の生き物で、このぬいぐるみはもう生産されていないらしいのです。さて、次号はぜひお楽しみに。



九州にこだわり、撮って書く
フォトライタースオフィス

メニィデイズ

代表 間々田正行

〒810-0033

福岡市中央区小笹4丁目4-10

☎ 092 (525) 6866

FAX 092 (525) 6822

携帯 090 (1083) 1993

mail manydays@sky.plala.or.jp



柴又ロケの際、
瀧美さんが出番を待つ間、座っていた団子屋の高木屋さんの席。
ここが指定席だったそうで、今では永遠の予約席となっています。

トラ、トラ、寅

映画の話をしませんか。私が生まれ育った大牟田にまだ映画館がたくさんあった中学生時代、洋画を3本もかけるいわゆる2番館、3番館というのがあってよく観に行っていました。ちょうど、淀川長治さんの日曜洋画劇場が人気のところで、いつの間にか映画好きとか洋画好きになっていたようです。邦画はきらいでした。やくざ映画ばかりで、しかも低予算。ストーリーはワンパターンと、ネガな面ばかりが目につくところが、大学に入ってキネマ旬報を読み始めると、邦画のことが熱く語られて、ある日、深作欣二監督の「県警対組織暴力」を観たら結構面白かった。それからす、すてもんじゃないと、もつぱら邦画を観るようになったのは。でも、寅さんだけはダメだった。若かったから、べらべらのヒューマニズムに思えたんでしょうね。ところが、初期の作品の多くがキネ旬の



ベストテンに選ばれていて気になり、試しにビデオで観てみたら笑えたんです。そして、少し哀しかった。それが30代半ばころ。近年はDVDで何度も観直すほどはまってしまいました(特にリリーが出るやつ)、一昨年の夏はついに柴又へ取材に行くこともできました。そんな私は明日、撮影でまたどこかの空の下です。